



Title	碩園先生懷徳堂重建當時の講演：演題「懷徳堂の由末と將來」
Author(s)	西村，時彦
Citation	懷徳. 1925, 2, p. 26-38
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/88701
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

懷德堂の由來と將來

西村時彦述

左の一篇は、大正四年十月十五日、懷德堂開堂式に於て演べられたる西村先生講演の筆記にして、先生が後半生の心力を傾注せられたる重建懷德堂と先生との關係を知るの一端ともなるべければ、特に此に之を載することはない。

私は本會理事の西村時彦でござります。初めてお目にかゝる次第でござります。何うか將來お見知り置かれたく存じます。

只今今井理事からお話をされましたる通り、此の十五日に本講堂の開堂式を舉行致しましたが、此は安位、開堂の式と云ふ二つのものを一時に行ひましたので、安位と云ふのは神位を奉安する所の儀式でござります。此處に神殿を祠つてござりますが、其の神位を奉安する儀式に兼ねまして開堂の式を行ひました事でござります。デ追々此れから講義等を始めると云ふ事に就きまして計畫を立てゝ居りますが、將來の事業等に就て説明を致します前に、少しく前に遡りましてお話をしたい。

夫れは私共が此の計畫を致しまするに就ては、所謂大阪の先賢を祭ると共に、場所の變化なり時代に適應します事を考へて遣つて居ります。夫れに就きまして此の講堂の設備を申しますれば、此の祠堂と云ふものに兼ねて講堂を造つたと云ふことで、之が他と異つて居ります。

祠堂は先賢の祠の如きもので、又之を講堂にも使ひます。平常は之を閉めて講堂と致し、又記念日に祭典を行ひますれば之を祠堂と致すので、之は支那に其の制度がござります。支那は只今亂れて居ります爲に、動もすれば輕侮の念を以て見ますけれども、東洋の文明國として古い國だけに總て斯う云ふ事が出來て居ります。私が南京に居ります時に文正書院と云ふ學校の中に居りました。夫れは長髮賊を平げて學問を尊びまし

た功業の偉大なる人で、先づ宋の范文正公以後第一人と稱せらるゝ曾文正公の功業を記念する爲に南京に文正書院と云ふのが立ちました。書院の名は文正の諡を取つたので、之を記念する爲に書院が立つてゐる。固より學校は此の一つでござりませぬ他にもござりますが、私の此處に住居をしたのは親しく其の文正公の徳風に達したいと云ふ希望からでござりました。デ此の書院は即ち正面の祠堂に曾文正公の神位があつて左右の堂宇は學校になつて居る。所が誠に荒れ果てゝ居ります。誰も居る者はござりませぬ。私は書生を引連れて此處に住居を致して居りました所が、當時の總督劉坤一が、何うも不審な人が來たものだ、日本人が來て彼の破れ書院の中に居るとは餘程奇妙だと思つて私に尋ねた。其處で私は豫て文正公の全集を讀んで其の徳を慕ふて居るものであると説明した所が、頗る奇異に感じたと云ふ事でござります。デ私は成程奇異に思ふ所だ、斯う云ふ學校が荒れて居るから支那が衰へる筈だと考へました。若し之が日本であれば、一遍學校が立つた以上は此の文正書院の荒れ果てた如くになつては詮のない事である。デ先づ文正書院の如く其の儘ではござりませぬけれども、祠堂に兼ねた講堂を造つたのでござります。

さて聊か懷德堂の昔に遡る必要があると思ひますので、其の大略を申し上げますが、此の懷德堂の創立は只今より百九十二三年前の享保九年でござります。此の時播州龍野の人で醫師の子息さんでありました中井登庵と云ふ、之が此方に出て來て修業を致して居ります中に、學友が段々出來て來た。當時の大商人の中で心ある人達であります。それは舟橋屋四郎左衛門、三星屋武右衛門、道明寺屋吉左衛門、備前屋吉兵衛、鴻池屋又四郎此の五人の友達が申合はせますには、大阪も段々寺小屋の様なものはあるが、然るべき先生を聘して道徳上のお話を色々する學校を建てやうぢやないかと云ふ所から、登庵先生を中心として五人の同志、此の五人の人達を五同志と稱へます。志を同じうする人々でござります。而して道明寺屋吉左衛門の借家の間口六間奥行十何間ある所をば學校に取り立て、懷德堂と名をつけました。而して先づ細々遣つて居ります中に、此の時分の將軍家は八代將軍吉宗公でござります。此の人は文學獎勵で名高い人でござりますが、

追々各藩にも學校が立つ。其の時代はまだ誠に少なうござりますが、江戸にも郷學が起された、大阪の如きは大都會であるのに學校のある事を聞かぬ、若し學校を建てる計劃をするものがあれば、世話をして遣つて宜いと云ふ御沙汰のあつた事が宿直のものから三輪執齋に傳はつた。執齋から贅庵に手紙が來た。丁度良い折である、寄附金で學校を建てゝゐるが、さうなれば盛大になる事であらうと願立をした結果、幕府から敷地を貰つた。之れで學校も大分擴張されて、間口十二間奥行二十間位と思ひますが、只今では今橋四丁目の日本生命保險會社の煉瓦造の建物のある所でござります。而して夫れが年貢を免されて、總て公けの公立學校の形になつた。又五同志が主となつて大阪の心ある人達から寄附を募る。即ち此處に半官半民の公立學校が立ちました。大阪に於て始めて出來た所の大阪人共有の公立學校でござります。之が私共が重きを置く所でござります。單に中井贅庵や五人の大町人が寺子屋を開いたと云ふなれば左程に思ひませぬが、大阪三郷の人々が町人教育の爲に立てた所の公立學校と云ふのが、性質の重い所と存じます。デ此の時の制度は、學校が立ちますと同時に大阪に居つた三宅石菴——此は京都の人で、此の人の弟は三宅觀瀾と云つて水戸の日本史の編修に參られた。その兄さんが石菴でござります。夫れを聘しました。が最初より此の人に相談を致しませぬ。あの人が居られるからと目星をつけて、初めから相談をするを辭退するかも知れぬから相談はしなかつた。之は遣り方が宜しい、遂に此の人を聘して學問の主とした。夫れは學主と名をつけました。即ち一名教授でござります。夫れから預人、只今で申さば我々理事の如きものでござります。之を贅庵先生が遣る。その他に行司——相撲の行司と同じで幹事の役でござります。而して申合せますには、學主も預人も世襲を許さない。即ち教授が理由あつて去られたらば更に良い先生を迎へる。其の子息さんを後に据へない。又預人も其通りでござります。此の學校は私有物でない。之は大阪の共有物で半官半民の學校である。其處が大變に宜い所であらうと思ひます。デ石菴先生——即ち此の（講堂の正面の額）懷德堂の額を書いた人でござります——此の人を學主に、五井蘭洲先生を助教に聘しました。が夫れでは足りませぬから京都の

方から學者を聘して、伊藤東涯先生も時々講釋に來られる。三輪執齋先生も時々講義に來られる。斯う云ふ風になつたのでござります。

デ學校の初には何んなことを教授したかと云ふと、只今壁書と申して定め書きが残つて居りますが、此處に三つの著しい事がございます。第一は學問は家業を大切にする上に御座候、と斯うある、家業を大切にする爲に學問をする。大阪には一人も無職のものはない。只今でも善く働く所である。是が第一である。第二は武家は可爲上座事、但講釋始まり後出席はゞ、其の差別有之まじくは、とある。此の時代は藏屋敷もござります。城には大名も來てゐる、又城附の與力もあるから秩序を立てたものでござりますが、併し後から來られたならば、武家と雖も後に坐はる。又一には急用のある折には講釋半ばに立去つても宜いと斯うある。之は大阪は一刻半時を爭ひまする商業上の取引がござります。夫れで得意先の人が來て相談のある折には、講釋半ばに立去つて宜いと云ふので、之は土地の事情に適應した遣り方でござります。

又書物を持たざる人も來られて宜いとあつて、町人が書を挾む事を好まない時代であるから斯う云ふたので、士民教育、町人教育が主になつて居る。其の定め方は迂濶な學者の仕事でなく、土地の事情を參酌した所の立派な遣り方で、世間に類のない事と考へるのでございます。

さて石菴歿して五井蘭洲は、一旦奥州津輕の、大名に抱ねられて藩儒となつて居つたが、辭退をして歸つて來られて、石菴の後を嗣いで學主になられた。之は中々識見のある立派な方で、大阪土着の人でござります。其の先祖は京都から來たが、お父さんは五井持軒と云つて、年中四書を繰返して講釋をした。四書さへあれば教育は十分夫れで宜いとした。其處で四書屋加助さんと人が言つた。之は先哲叢談に浪華の文學は持軒より始まるゝある。其の人の子息さんの蘭洲先生が學主に据つてから、餘程學問の風も變つて來て、初めは丁稚番頭に教へる位であつたが、段々進んで來て立派な學生も來た。其の門下に塾菴先生のお子の竹山、履軒と云ふ大學者を仕上げた。蘭洲は餘程力量のあつた人であると云ふ事が解ります。デ竹山履軒の兄弟は

餘程の働める人で、竹山は世間で俗物の様に言ひ、履軒は之を雅人として居りますが、竹山は學問も出來れば、心の誠に正しい人で、決して俗物ではない。非常に働きのある上に、政治の才がある。爲に此の懷德堂は非常な發達を致しました。嘗に大阪の人々が學問をする許りでなく、西は中國九州、東は江戸からも參つた。中に、脇愚山と云ふ豐後の人で、肥後領で、肥後侯の藩儒となつた。之が高足弟子となつた、又又中國には九川松陰と云ふ人も門人になつた。其の學問は其の門人に傳はつて三島中洲なども出て居られる。夫れから江戸から參つて居りましたのは佐藤捨藏でござります。之は後に一齋先生となつた大學者で、捨藏と名乗りましたのは生命を捨てゝ遣れと云ふので名づけましたので、此方に參つて居ります中に、良家のお嬢さんから手紙を貰ふた。所が其の手紙を親達に返して了つた。餘程風采の立派な人であつたと見えますが、生命を捨てゝ學問する覺悟であるから、其の女の文も返したと云ふ人でござります。此の人が竹山の門人となつて居つたが、歸つてからは江戸の昌平黌の教授になつた。さう云ふ風に懷德堂へは四方より人が集まりましたが、其頃大阪には一方には近松門左衛門があり、一方に懷德堂がある。夫れに對して混沌社と云ふがある。――越後の學者で片山北海と云ふ人がある。其の人が風雅の人達と寄つて詩會を遣つて居つた。夫れを混沌社と云ふ。夫れから鍋釜屋某とか、或は田明とか、風雅の道に携つた人は澤山にあつたが、夫れは一時的のものであつて、北海が死ぬると絶えて了つたが、懷德堂はズツと立つて居つたのでござります。然るに竹山先生の長子蕉園先生――此の人は大才子で此の人が長命であれば如何に大阪の文學が盛んであつたらうと思はれますが、早世をした。竹山先生は非常な落膽であつた。夫れから又寛政四年の子歲五月十六日に大火があつて、今橋の懷德堂も類焼の厄に遭ひました、之が復竹山の大落膽であつたが、何うしても再建をしなければならぬと云ふので、江戸へ度々行つて奔走をしました。僅に、三百兩を得たのみで、後は又大阪の寄附金に依つて再建が出來た。夫れが寛政四、五、六、七年とかゝつて、七年に工を起して、八年に成就して居る。其の苦心が思ひ遣られるのでござります。再建の年即ち寛政八年丙辰六月に講義開きがござります。之は

先日も申しましたが、今年も大正五年丙辰の歳、竹山先生の再建も寛政八年丙辰の年でござります。御幣を擔ぐ様でござりますが、不思議な事があるものだと思つて居ります。デ竹山先生歿後は、履軒先生が駕籠に乗つて來て講釋をせらるゝ。之も學主になつたさうでござりますが、其の歿後は竹山の第七男の碩果先生、一此の人の奥さんは山陽先生とは姻家になる人でござります、一其の人が繼がれた。其の後は履軒の孫の桐園の代になる。桐園は柿園の子でござります。其の他に竹山先生の外孫並河寒泉も敎授に坐つて居つた。デ最初五同志が立てました規則は世襲を許さぬといふ事であつた。所が此の竹山先生歿後は名前は世襲でなく代るゝ遣つたのでありませうけれども、其の子孫及び其の外孫に依て維持された所から、他から學主を聘して來ることが出來なくて、中井家の私塾の如く誤まつたのは、遺憾であつたらう。動もすれば今日でも懷德堂は私塾の様に感じられるのは、末路が斯ふ云ふ風になつた爲めである。之は中井家の罪でなく、大阪人の罪である。大阪人が寄附をして建てて居る學校である。夫れが終ひにはお世話が届かなくなつて斯うなつた。而して中井一派が維持をするに餘程苦んで居つたと云ふ事を察するのでござります。明治二年に至るまで、享保九年から百四十六年になる。又半官半民になつた享保十一年からは百四十四年になる。其の間之を繼續した所の功績は之を中井家に歸せなければなりません。之は決して中井家の私塾でなき證據は、半官半民になりました享保十一年から大阪學問所と稱へました。懷德堂は享保九年に立ちました時の名前で、其の名前は内らて繼續するが、表面は懷德堂と云はずして、大阪學問所と云つた。即ち昌平坂學問所と云つて居る如く、學校と云ふ事は世襲の學校であると言へない。大阪學問所と稱へて居つたが、市内では單に學校々々と云つて居つた。先日千草屋から古い書付か出て來ましたが、夫れには學校中井竹山先生とある。夫れが一の證據でござります。今橋の舊懷德堂の屋根瓦には學の字が入つてござります。夫れを象りまして今日出來ました懷德堂は、矢張り徽章を學の字に致して、瓦にも幕にも學の字を使つて居るのは、さう云ふ歴史に由るのでござります。で明治になりましてから世が變り、遂に廢校になりまして百四十四年にして廢止されま

した。廢止されましたが大阪の今日ある市の繁榮發達は、決して算盤の上から彈く資本でなく、無形の資本である。夫れは懷德堂に重きを置かねばならぬ所から、此處に記念會と云ふものが立ちまして今日に至つた。其の經過は先刻今井君の話された通りでござります。で之を再建致すに就きまして、幕府より官地を貰つたと云ふに象つて、大阪の府有地を無償拜借しました。夫れから寄附金に成立つたと云ふ懷德堂の昔に鑑みて、廣く寄附金を募りましたのは、先賢の遺つた事に象りました。次に肝腎な事は、前の五同志連が學校を建てると共に石菴を學主に致しました。之を我々は遺らなければならぬ。此の堂が建つた計りでは魂が入りませぬから、一つ教授を聘して此處に常に目を定めて經書の講義をしなければならぬ。斯う致しました時に、其の教師たる人の選擇が誠に困難でござります。學問の蘊奥を極めますには最高學府がござります。此の學校に於ては、單に學術を研究するのみでなく、先賢が士民教育の精神的修養を第一に致しました所に鑑みて、學問が善いと云ふ許りでなく、品性の善い人を選ばなければなりません。斯う云ふ事で決して世間に名を賣つて居る學問上手な人にお頼みは出來ず。色々問合せ色々銓衡をした結果、此のお方が宜からうと云ふ人を見つかりました。其のお方に交渉をした所が、固く御辭退でござります。中々竹山先生の居られた學校に据はるのは、我々風情でいかぬと云ふお話であつたさうでござります。所が種々懇談の結果、遂に内諾を得ました。然るに只今現職に居る人でござりますから、未だ公の進退が決せられませぬ前に、其の姓名等をお話申上げる事の出來ないのは遺憾でござりますが、學問品性に立派な人と存じます。他日發表する時機をお楽しみにお待ちを願ひたい。

デ教授は出來ると致しまして、矢張學術の門戸の見を開いて、學派等を別に致して、京都から東涯先生或は執齋先生をお頼みした先賢の遺口が面白い。其處で夫れに倣つて一つ大阪に廣く學者を聘して講義をせねばならぬ。夫れには幸福な事には僅に一時間位で參られます京都の地に、我々は京都大學を有つて居る。此處から學者を聘して來れば、大阪は幸福である。所で大阪には府立醫科大學又は關西大學、高等工業學校、

高等商業學校など彼此學問の場所はござりますが、第一の缺陷は文科である。文科即ち無形の學問に就て缺乏をして居ります。之を補ふには此の懷德堂に因んだ所の經學史學、只今の哲學歷史學の教授先生を聘しようといふ考で、定期講演を致しますといふことに致しました。之には京都大學總長にお願ひをし、文科大學長にも願ひをして、經學の方では狩野直喜君、史學では桑原隲藏、三浦周行先生、内藤君、夫れから高瀬博士が哲學、内田博士が經濟學、斯う云ふ方々にお願ひした所が、快く承諾をせられて、此方に來られる事になりました。之は大阪のお方々の見て居られるよりも、懷德堂と云ふものが東京京都神戸に於て重きを置かれて居ります。殊に講堂の出來ましたに就ては、之は殆ど奇蹟だ、大阪の如き物質的地に於て、誠に感心な事だと云ふので、一層重きを置かれるものと存じます。デ前述の諸博士は快く承諾を得まして、毎月二回——私は一週間一回宛にも願ひたいが、只今本會の狀態ではさうも行きませぬので、一箇月一回と云ふ事に致しました。夫れから此處に教授が來られましたなれば、一人ではいきませぬから、助講も入ります。此の方は定日講義と名づけまして、之れは書物によつて遣る。經書の講義或は史學の講義をも遣る。一週間三回と云ふ事に致しましたが、只今は腹案だけで、確に定めて居りませぬ。夫れで定期講演の方は、文科大學の諸教授に願つて、月に二回宛——先づ二回として追々は四回になるだらう。之を開く事に致したい。

さて大阪の今昔——今と昔と較べますと非常な差である。もとは大阪は大阪贅六とか、聞くも嫌な言葉でござりますが、多少の輕侮を以て見られて居つたが、今日では誤解であつた事が、江戸の人京都の人に解つたと見ゆる。之は懷德堂のあつた事を知らなんだ爲で、大阪の文化に如何なる根ざしがあつたかと云ふ事は知らなかつた結果であらうと思ひます。所が近來になると餘程評判も宜くなつた。其の原因は二つある。第一は維新前に於て變がありました上に、維新後に於て中小學の設備が行届きまして、新らしき教育が普及されて居る。諸君の力によつて教育と云ふものが行涉つて居りますから、昔の如き輕侮を受ける筈はない。第二には大阪の人は力量の大きい人がある。個人の事業で以て美譽が澤山出來て來る。中之島府立圖書館を初めとし

て、近來は公會堂或は結核病療養所、或は百萬圓を寄附すると云ふのが續々出て来る。金を持って大阪人は生きて居る。と云ふのは大阪の人は金儲けが出来来る。儲けるが其金に執着しない。極めて太ッ腹である。商賣も大膽であるが、出す方も大膽である。中々江戸の商賣人の敵する所でない。之には驚き入つて居る有様である。東京で書物を出版するが、其の賣場は大阪が最も目ざす所で、購讀者の購買力の盛んな所である。大阪で賣れないと、書物は出せない。即ち大阪は讀書人の多い所であると云ふ事が解る。斯う云ふ事で一寸見る目が違つて、總て敬意を拂つて參つた。此の懷德堂の如き即ち多數の紳士に依て出来たと云ふので、一般が悉く敬意を以て見て居る事であります。之に就て内輪話を申し上げますが、一人の富豪に依て立つ事業は大きくはござりますが、數は少くとも目ばしい大きなものがある。私共お世話をして居る懷德堂の如き、衆力を合しますものになると、金を出す方は其の數が少くない。大變に大きな評判の割合に、基礎は誠に小さい。斯う云ふ事になる。寄附金事業に寄付くと、金を出せと云はれはせぬか、斯う云ふ氣もありはせぬかと恐れて居る。只今井君から申された通り、本會の寄附金は百圓以上の極めて零碎なものでござります。世間の寄附金事業の如き、募集に巧妙な方法を用ゐず。公衆の自發的に依つて集めたるものでござります。殊に其の世話人が御覽の通り我々如き老書生、中々金を出して下さいとは得言はぬ。手紙を遣る。お目にかゝつてお話をする。夫れ位の事で、募集方法は甚だ遅々として居る。さりながら中々出来ないと思はれたものが今日出来て居ります。將來は此の懷德堂なるものは大阪の公有物である。決して個人のものでない。我々の共有物である。我々は懷德堂と云ふ書齋を所持して居るのだと云ふ事が解りましたなれば、而して事業が有益である事を證據立てらるゝなれば、必ず人は捨てゝ置かれまい。懷德堂は永く維持される事と思ひます。

大阪では或る家に於ては、昔家憲として學問を禁じた家もあると聞きます。併しながら富と學問と云ふものゝ關係は重大なもので、今日になると種々の學問研究所が起る。學問に由て富が造らるゝと信するが、さう云ふ大きな事でなくとも、富潤^レ屋德潤^レ身で、金が出来れば臺所の藥罐までも光り出す。斯う云ふ事にな

るのは、富の力であるが、大家の御主人が何うも評判が悪い徳がない。徳潤し身であるから、徳のある人は顔色も柔かで、瘠ぎすの人でも學徳に依て立派な紳士に見ゆる。其の時は何處で養ふか。矢張斯う云ふ所でないければいかぬと存じます。追々徳を造るに熱中さるゝと共に、徳を造るには注意が必要と存じます。已に諸君の從事せらるゝ小學校あり。又中學校がある。此の上に斯う云ふものが必要もなからうとお考の方があらうと思ひますが、學校を出てから繼續して高等の學校に進む人は宜しうござりますが、中學校も卒業せず中途で止める人も多からうと信ずる。夫等の人は學校に居る間は宜いが、出てからは丸で違つて来る。之は温めていかぬと危険である。丁度兵隊に入つて居る間は元氣に服従して居るが、一旦出ると——其の軍隊生活の習慣が應用されたなれば、餘程儉約家になり、而して規律ある事業も遣つて、日本の富の上に餘程宜くならうと思ふが、夫れが軍隊の窮屈なと反對に、却て放縱になる傾向もある。即ち學校の教育を温めて行くと云ふ事の必要が起る。學科も澤山ありますが、此處では精神教育の上に重きを置いて、而して修養と云ふ事を第一に致しましたなれば、子弟の爲に餘程有益と存じます。デ名門良家の子弟若しくは商人なども此處に來られるであります。さうでなく、俄富限者なども、何に學問は入らぬものだ、學者は迂闊なものだど云ふ人でも、必ず此の懷徳堂を思ひ起されて來られる時が來やうと思ふ。其の實例として漢高祖の事を申上げたい。

漢高祖は誠に無賴で、若い時は親兄弟に迷惑をかけた人でござりますが、天下を取つて四海を治めると、此處に責任が生ずる。自分の子の皇太子に天下を譲る時になつて、之れではいかぬ、學問をせねばならぬと、眞心から其の皇太子に教訓を施して居る詔書がある。此の詔書は史記にも漢書にもない。唐の世に或る寺から出た古文苑と云ふ書中に入つて居る。其の注に高祖傳に這入つて居ることある。高祖傳は漢書藝文志の中に出て居るから、唐の頃まではあつたものに相違ないが、今日は途中で亡びた。支那にはさう云ふ本が澤山ある。支那に滅びて日本に残つて居るものがある。此の古文苑の詔書は確かなものと思ひますが、其の文章は

『吾遭亂世。當秦禁^レ學。自喜讀^レ書無益。洎踐祚^レ以來。時方省^レ書。乃使^レ人知^レ作者之意。追思昔所^レ行。多不^レ是。』自分は亂世に遭ふて、丁度秦始皇帝が書物を焚いて讀書を禁じた時である。爲に我は無法なる事を喜んで、博奕を打つたり勝手な事をした。然るに天子の位を踐んでから、時々書物を讀むと、作者の心行が解る。孔子の言ひ置かれた意味が解る。先づ自分の爲した事を追思して、考を思ひ廻らすと、大方悪い事であつたらうと思ふ。之ではいかぬからお前は學問をしると教訓をした。夫れで大阪で丁稚上りの人達が、風雲に乗じて百萬長者になる、漢高祖が天下を取つたと同様であるが、夫れと同時に多くの使用人を使ひ、又紳士の仲間に入つて交際をする段になつて、始めて自分の修養の足らぬ事に氣が付く。折角造り上げた百萬圓の財産を子孫に傳へなければならぬが、何うも此の子供ではいかぬ。其の時に屹度修養をさせる氣になつて、丁度漢の高祖の詔と同じ訓戒が子供に施される。私は若い時に修養の暇もなかつたが、お前は紳士として世に立つ以上は、書物を讀まなければならぬ。斯うなつた時に、私は、懷德堂は其の人々の好い遊び場所、修養の場所と信じて居ります。

デ懷德堂の學風を一寸お話申上げますが、之は經書を遣るのは勿論でござりますが、日本の歴史學を尊重して居る。竹山先生には逸史あり、履軒先生には通語がある。夫れから大日本史が水戸で出來ました時には、非常なお願ひ立てをして、尾張藩から之を借り、門人や誰彼寄つて晝夜之を寫し取つた事もあり、歴史研究に力を盡した。日本の漢學者は動もすれば歴史に暗いが、此の學校だけは歴史を尊重する。竹山履軒共に國文の著述が澤山ある。之は特色でござります。經書を學ぶと共に史學を尊重する事に就て、履軒先生は京都の方に若い時分行つて居つて、而して東坊城家の世話になつて居つた。一年許り經つて歸つて來られたが、夫れは京都で大學を建てると云ふので、公卿さんが其の相談になつたと云ふ話でござります。後に竹山先生に建學私議と云つて、京都で大學を建てる話があるので、其の意見書を書いた。夫れが残つて居つて、天保年間に、孝明天皇さんが學習院をお建てなさる爲に、東坊城に學習院學則を作る様に命ぜられた。其の時の學則

は『尊^ニ聖人之至道^一。崇^ニ皇國之懿風^一。不^レ讀^ニ聖經^一。何以修^レ身。不^レ崇^ニ國典^一。何以養^レ正。明辨^レ之。務行^レ之。』斯う云ふ事でありますが、之が即ち竹山先生の建白書に依て立てられたと云ふ話がある。故に此方に於ても國史學を經學と共に研究したいものである。

尙實踐躬行と云ふ事が、懷德堂に於ては餘程大事な事になつて居ります。整菴先生も親孝行である。竹山履軒も親に孝にして、且師に忠實である。蘭洲先生中風になられた折は、有馬の湯治に連れて行く。夫れから少し快くなると、我が家に連れて來て、一生涯師に事へて終を全うされた。誠に善い行でござります。又何處其處に孝子があるぞ聞くと、其の孝子の事績を書いて世間に配る。善行を表彰する事に忠實で、履軒先生も人の善を聞けば流涕して喜ばれたと云ふ事である。學問は實踐躬行を旨とする。我々深く心に銘して、而して其の學風を其の方に持て行かなければならぬと考へて居ります。デ學問に二通りござります。一つは専門家で、之は生命を的でござりまして、親の仇を討つと同じでござります。三宅尙齋先生は血を吐いた爲に、闇齋先生に學問を止めると言つた時に、非帝に叱られた。朝に道を聞いて夕に死すも可なり、學問せよと叱られて、夫れから非常に學問された處が、學問の力に由て、氣力を回復して、病氣は治つた。而して學者になつたと云ふ事がござります。又一面には大阪に於ては學校を卒業後の人達も、紳士としての修養をする。即ち書物を持たぬでも講釋を聞きに來ると云ふ事が、餘程面白い所でござりますから、其の邊の所を參酌して、今度も遣つて居るので、定期講演にも立派な學校の卒業生即ち學士達も見ねるであらうと存じます。又教育家の希望に依つては話を二つに分つて、斯う云ふ風にする積りで居ります。夏の休みを利用して、講習會へ諸君もお出でござりますが、幸ひ最高學府の諸教授を聘して、不斷の講習會を開きます事は、世間に類例のない宜い事と私は信じて居ります。中々さう云ふ事を斷らず諸教授が遣つて下されるのは破格の事で、且又大學の門を潜らんと困難して居る學生達が、此處に來れば大學に居ると同様、繼續した講演——即ち一場の話し放しでなく、繼續した學說を聞かれる。而して筆記もされるなれば、青年達も餘程利益を

感ずる事と信じます。

皆さんは平生教育に従事の方でござります。何かと懷徳堂の將來の事業に就ては、お考へもござりませう。御遠慮なく我々に御注意下さると共に、斯う云ふ風の科目を立てゝ遣つて貰つたなれば、自分達の修養にも宜からうかと云ふ様なお考がござりましたなれば、承りまして實行の方法を研究して見たいと思ひます。諸君は教育に専門に當つて居らるゝ人達でござりまするが、誰れしも同様、學問の研究には際限がござりませぬ。矢張一つの教は學ぶの半ばで、教育をなされつゝ御自身の修養もお感じであらうと存じます。若し斯う云ふ風の事を催して呉れたなれば、自分達も面白い事であらふと云ふ感がありましたなれば、我々にお告げを願ひたい。尤も之は今日に限りませぬ。御集會の折柄、幸ひ懷徳堂が出来たが、此の講堂に於て斯う云ふ學者を聘して、斯う云ふ學問をやつて貰はうと云ふ御決議が出来た様な事が、我々の最も希望する所でござります。私共は不才不徳、中々實踐躬行だの道徳だのと口にするに至りませぬ。さりながら同志者の後に從つて、二十六七年間私も大阪に住んで居ります。市民の忠實なる報効として、今日のお世話をして居るんでござります。將來諸君の援助に依て實効を擧ぐる事が肝腎でござります。講堂は立派に出来たが、此の上は實効が肝腎である事は、誰しもお考にならうと思ふ。我々は教育に經驗ある諸君の御意見を尊重したい。又諸君の御幫助を仰ぎたいと思ひます。

今日は長々しきお話を申し上げまして、已に諸君には新聞にて御承知の事を、物議顔に致しました事は、誠に失禮でござりまするが、之も只今申す通り、私は他國ものでござりますが、二十六七年間大阪に居りまする忠實なる市民として働きたい熱心の餘り、色んな事を饒舌りました段は、どうか其の邊は御諒恕下さいまして、將來の御輔導を希望致します。

(完)